

おふでさき 世界の歩く

第 3 回

山澤昭造

【やまざわ しょうぞう】
本部准員
天理教校本科研究課程主任

これから「おふでさき」を段落ごとに区切って読ませていただきます。各段落にはどのような事柄が述べられているのかを中心に、ポイントを絞って解説したいと考えています。

今回扱う第一号1―8のお歌は、第一号9―20のお歌とともに、「おふでさき」全体の序論であるとともに総論になります。

一号1―8 心をいさます

よろつよのせかい一れつみはらせど

むねのハかりたものハないから

そのはづやといてきかした事ハない
なにもしらんがむりでないそや

このたびハ神がをもていあらハれて

(一) 1

(二) 2



なにかいさいをといてきかする (一 3)

このところやまとのしバのかみがたと

ゆうていれども元ハしろまい (二 4)

このもとをくハしくきいた事ならば

いかなものでもみなこいしなる (二 5)

き、たくバたつねくるならゆてきかそ

よろづいさいのものといんねん (二 6)

かみがでてなにかいさいをとくならば

せかい一れつ心いさむる (二 7)

いられつにはやくたすけをいそぐから

せかいの心いさめか、りて (二 8)

【解説】

前回、「おふでさき」は、教祖が「世界のふしん」に本格的に取りかかろうとするところから、執筆を開始されたと述べました。

第一号1—8は、この道がなぜ始まったのか、そして、親神様がこれからどのようなにして人間世界をたすけ上げていこうとされているのかを示されています。

〈神が表へ現れて〉

人間世界を創めて以来、元初もとはじめりから今日まで、世界中のどこを見渡してみても、親神の胸、つまり親神の思いが分かって暮らしている者、真実の生き方をしている者は誰一人としていない——。

「おふでさき」の冒頭、1のお歌で、現実のこの世界を生きる人間のありようを、このように述べられています。親神様がご覧になったこの世界の現状です。

続いて、「それも仕方のないことだ。これまで何も説いて聞かしたことはなかったのだから。何も知らずに暮らしているのは無理でない(2)」と温かい言葉を掛けられたうえで、「しかし、このたびは親神が表へ現れて、これから何についてもみな、詳しく説いて聞かすようにする(3)」と宣言されるのです。

3の「このたび」は、天保九(一八三八)年十月二十六日を指します。「表へ現れて」とありますが、これは見方を変えると、親神様は立教までの長い年月の間、「裏」から守護し、お見守りくださっていたということなのです。

親神様は、この世人間をつくられたばかりでなく、その人間が無事に成人するよう、今日まで陰から守護し、手を差しのべてこられました。

知恵や学問は親神様が仕込んでくださったものですし、医者、薬も親神様が修理肥として教えてくださったものです。そして、これまでにあるさまざまなか宗教の教えも、実は、そのときどきの人間がよりよく生きられるよう、親神様が聖人賢者を通して教えてこられたものです。親神様は、今日まで限りない親心をもつて、裏から人間世界を導いてこられたのです。

このように、十のものなら九つまで教えてこられたのですが、人間はそのを、やのご恩にすら気づかずにいる。そこで、このたびは、約束の年限もきたので、親神様が、教祖をやしんとして、自ら表に現れられ、いままで教えてこなかった最後の一点^{だめ}を詳しく説き聞かすことにする。学問や人間の悟りでは知ることのできない、この世の真実を教え、親神の思いが分かるようにしていくのだ。このように述べられているのです。

この世人間を創められた親である神様が、直接表

へ現れ、「よろづいさい」を説き聞かせてくださる。それがこの道であると言われているのです。

〈これから元を知らせる〉

それでは、親神様がこれから説き聞かせてくださるお話はどのようなお話か、その一つが、4で述べられている事柄です。

まず「かみがた」とは、『おふでさき註釈』には、「神館かみやたの詰かみやたまったものと解す」とあります。「みかぐらうた」十一下り目一ツにある「かみのやかた」の詰かみやたまった形です。

「この所を、大和のぢばの神の館」と言っている」とあります。慶応三（一八六七）年にできた「みかぐらうた」の中に、「こゝはこのよのものとのぢば」（五下り目 9）とあるように、「このお屋敷が神の館」ということについて、教祖はこのころまでにすでに話されていたでしょうし、当時の信者にしても、その深い意味は分からなくても、なんとなく聞いて知っていたと想像します。なぜ神の館と言うのか、その「元」をこれから知らせると言われているのです（※1）。

「元」については、6で「もとのいんねん」と表現されています。人間とこの世界はどのようにして始まったのか。人間の暮らす世界はどのような世界で、そのなかで人間の真実の生き方とはどのようなものなのか。それを、元初りにまでさかのぼって教えてやろう。「元初りの真実」をこれから知らせると言われているのです。

そして5にあるように、この「元初りの真実」を教祖から詳しく聞かせていただいたなら、どのような者でも、親神様を、親里ぢばを恋慕せずにはおれなくなるのです。

〈世界の人の心を勇むようにする〉

そのような「元初りの真実」を伝えるにあたって、6では、ぜひ聞かせていただきたいと思ってお屋敷へ訪ねてくるなら言ってお聞かせよう、とあります。それに対して、7では、それを待つばかりではなく、これから、よふぼくを仕込んで積極的になをいがけをしていくと言われているのです。

7の「かみがでて」は、3の「神が裏から表へ現れて」と少し意味が異なります。「よろづよ八首」

で「出て」は、前に進みながら、手を斜めに放り上げる手振りをします。親神様が積極的に前に進んでおられる様を表現しているように思案します。「親神様がよふぼくと共に」積極的に布教伝道をする」という意味に解釈することができます(※2)。

そして、ここで、もう一つ注目したいことは、「ゆてきかそ」(6)、「いさいをとく」(7)というように、「お話」に重点が置かれていることです。親神様のお話を伝えていくことで世界一れつの心を勇まそうとされているのです。

8において、親神は、一れつに早く「たすけ」をもたらしたいと急いでいるから、世界中の人の心を勇めかかっている(勇むようにしている)のだ、と言われています。親神様の望まれる「たすけ」は、人々の心が「いさむ」ことが大きく関わっている。心が勇んでいなくてはたすけられない。心が勇むところに、「たすけ」がもたらされるのです。

なお、「おふでさき」において、「いさむ」という言葉は特別な意味を持っています。芹澤茂せりざわしげる『おふでさき通訳』(道友社、昭和56年)は、「いさむ」という言葉を次のように説明しています。

……ここで「いさむ」と言っているのは、一般的意味で「勇んで何でもする」ということよりも、心を澄まして親神のお話を聞き、神の心がわかって初めて生まれて来るような心を意味している。

(17ページ)

心を澄まして親神様のお話を聞かせていただくところに、親神様のお心やご守護のありがたさが実感として身に迫って分かってくる、そのような生き生きと躍動した心を「いさむ」という言葉で表現されているのではないでしょうか(※3)。

そして、人間の心が勇むのをご覧になって、親神様もまたお勇みくださるのです。



一号1—8のお歌は、「みかぐらうた」の「よろづよ八首」と唱句がほとんど同じです。明治二年にご執筆になったものを、歌いやすく踊りやすいよう

に整えてくださったのです。

教祖は、「よろづよ八首」は「十二下りのだし」とお聞かせになり(※4)、「十二下り」の始めに勤めるようになされました(十二下りのお歌は慶応三年につくられました)。「だし」とは邦楽の用語で、「唄い出し」「語り出し」の略した言葉です(※5)。

1—8は、この道の始まりが記されるとともに、これから世界の人の心を勇ませ、たすけをもたらしていくということを高らかに宣言されたお歌です。

前回、十二下りには、日々の信仰生活の基本的心得が記されるとともに、親神様と人間が協働して、これから「世界のふしん(世界たすけ)」に本格的に取りかかっている様子、明るい喜びとともに語られていると述べました。

その「世界のふしん」に取りかかるのに先立って、「よろづよ八首」では親神様の「ふしん」に向けての深い思いを述べられたのではないのでしょうか。

※1 一号4の「このところやまとのしバのかみ

がた」については、別の解釈も可能である。

「おふでさき」には、「しバ」または「ちば」とい



う言葉が全部で7カ所でてくるが(一号4、七号4、八号47、九号19、七号7、8、34)、一号4以外は、すべて表記は「ぢば」であり、その意味は、人間はじめ出しの元なる「ぢば」という意味である。そうしたところから、一号4の「しバ」はあえて使い分けをされているのではないか(一般的な言葉の立場)とする考え方である(諸井慶一郎『てをどりの道』正道社、立教179年、48―50ページ参照)。

なお、「こふき話」の明治十六年榊井本には、「……九億九万九千九百九拾九人の人が^数ずを南無々々と二人宛三日三夜にやどし^宿こみ、三年三月とどまり^留てお^居りて、それよりいまの^今なら、^{奈良}はせ七里四方のあいだ^間七日か、^{座下}りうおろし(ママ)、この^此しはが^が神かた^云とゆうのわ^此このところなり(中山正善『こふきの研究』道友社、昭和32年、135ページ)と、親神様が最初に人間を産みおろされたとき、奈良初瀬七里の間を七日間かかられた、そうしたゆえんにより、奈良初瀬七里について「このしはか神かた」というと説いている。

いずれの解釈をするにしても、「元」とは、この世の元初りにさかのぼっての事柄を指す。

※2 芹澤茂『おふでさき通訳』道友社、昭和56年、17ページ参照。

※3 「おふでさき」をはじめとする原典における「いさむ」という事柄については、山本忠明『「おふでさき」における「勇む」の理解——特に「いさむ」「いさめる」の用法に着目して』(『天理教校論叢』第46号、令和3年)に詳しく論述されているので参照されたい。

※4 『正文遺韻抄』道友社、昭和45年、74ページ参照。

※5 『日本国語大辞典 第二版(第8巻)』小学館、2001年、893ページ参照。